患群ではない可能性も考えられている。いずれにせよ、無症候性ブルガダ症候群における長期にわたる突然死の頻度を正確に把握する必要があり、そのことにより、真にICDを必要とする症例の臨床像が明確となることが期待される。

ブルガダ症候群に対する心外膜アブレーションは薬物抵抗性の心室細動ストーム例やICD作動を頻回に認める例で推奨クラスⅡｂとなっているため、症例ごとにその適応を十分に検討する必要がある。

４．刺激伝導系のペーシング治療について

ペースメーカ治療として従来右室ペーシングが施行されてきた。現在、ヒス束や左脚を直接捕捉し、刺激伝導系のネットワークを介して左室心筋の早期同期興奮が可能となり、より生理的なペーシング方法として注目されている。恒久ヒス束ペーシングの有用性は2000年に初めて報告され、心室ペーシング依存例では右室ペーシングと比較し、心不全入院及び死亡率を低下させる可能性がある。2021年本邦のガイドラインでは、恒久ヒス束ペーシングの適応として、房室伝導障害患者で、高頻度の心室ペーシングが予測され、中等度の左室収縮機能低下を認める場合をクラスⅡａとして、左室収縮機能低下を認めない場合はクラスⅡｂとして推奨している。今後は左脚領域ペーシングを含めた刺激伝導系ペーシングが、心臓再同期療法の代替療法として、慢性心不全の治療選択肢となることが予測される。

その他

午後からは山口県医師会勤務医部会の企画で下記の講演会が開催された。

講演１

臨床研修屋根瓦塾KYOTOを通じた医師会と若手医師との繋がり

京都府医師会理事
（元・京都府医師会若手ワーキンググループ）
京都第二赤十字病院消化器内科　堀田　祐馬

講演２

医師会による若手医師・女性医師の支援戦略：地元への若手医師の定着を目指して

京都府医師会理事
京都大学医学部附属病院
医療安全管理部教授　松村　由美

閑話求題

３年連用日記

山口市　小篠　純一

年齢を重ねていくと、昔の自分では考えられないような行動をとりはじめて、自分でもびっくりしています。

日記を書き始めました。私は、その日の出来事や感情の記載に対して、あまり価値を感じなくて、日記にまったく興味が無かったです。約１年前に後輩がSNSで「３年連用日記」を書いていると載せていました。これは、毎日の日付の１ページが、上中下に３段に分割されていて、まず上段に、今年の分を毎日コツコツ記載して、１年後には中段に、２年後には下段に、と記載していく日記帳です。つまり、３年分の同じ日付の日記が１ページに凝縮されることになります。後輩は「去年や一昨年の自分がヒント・知恵をくれますよ」と言っており、興味津々に私もやり始めました。

最近やっと、１年前の日付に到達し、１年前のその日の自分と出会えました。

１年前の自分も現在と同じような悩みや愚痴を言っていました。あ、成長してないな～、と感じながらも、来年の自分のためにも日記を続けて、少しでも成長の役に立てたいです。